

令和元年6月3日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17378

研究課題名(和文) 乳幼児期から児童期への園・学校における食経験の移行とその支援に関する調査

研究課題名(英文) Study on children's transition and support in mealtime experience from ECEC to primary school.

研究代表者

淀川 裕美 (Yodogawa, Yumi)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・特任講師

研究者番号：60773158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：園や小学校での食事場面に関する子どもの認識を中心に、保育者・教師の意識やかかわり、保護者等の意識を調査し、保幼小の移行期における食の支援の実際や課題を検討した。3園の5歳児園児36名、保育者等への意識調査と観察を実施、進学後も継続調査した。園児の描画と語り、保育者の語りの分析から、食事への関心が高い園児は食事内容、食事空間の全体、食事の段取り、一緒に食べる友達を描き、食事に課題をもつと保育者が認識した園児は、描画が少なく十分に認識していないことが示唆された。食事場所、時間、配膳方法等の環境設定によって描画の傾向が異なった。食事に関する子どもの主体的選択と食事内容の認識との関連も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり明らかにされてこなかった子ども自身の声を通して、園や小学校における食事経験に関する子ども自身の認識を調査した。また、子どもたちの食事を日々支えている保育者、保護者、栄養士等への調査を行い、そこでの援助の課題について検討した。食事場面に関する子どもの認識には、食事場所、時間、配膳方法等が関係していると考えられることが示唆されたことから、実際の食事場面の環境設定を検討するための視点を提供した。また、何をどれだけ食べるかに関する子どもの主体的判断の余地が大きいことで子どもの食事そのものへの関心も高まると考えられ、食事提供のあり方への視座を提供したと言える。

研究成果の概要(英文)：This study focused on teachers' role at mealtime in ECEC center and primary school. 36 5-year-old children and classroom teachers, parents, cooks from 3 centers participated in this study. The study continued until the children were in first grade at primary school. From analysis of children's drawings, interview and teachers' interview, it was revealed that children who had high interest in eating drew many contents including detail content of meal, meal place environment, procedure of mealtime, and their friends. In contrast, the children who had low interest in eating and/or those whom teachers recognized as they had some tasks related to mealtime did not draw much content. The trend in drawings and interviews of children was suggested to have relation with place, time of mealtime and how they serve meals. Also, the degree of children's autonomous decision on what and how much they eat seemed to influence how much they recognize about the detail content of meal.

研究分野：保育学

キーワード：食事の環境 子どもの認識 食事への関心 食事場所 配膳方法 子どもの主体的選択

1. 研究開始当初の背景

人類にとって「共食」(共に食卓を囲むこと)は、「人間関係を深め、連帯感を高める何か特別な力をもつもの」と考えられている(外山, 2008)。乳幼児が経験する「共食」のうち、特に園や学校における共食は家庭での食事場面とは異なり、家族以外の複数の保育者・教師や近い年齢の他児とともに集団でテーブルを囲み、他者からさまざまに学びながら食事をする機会である。そこでは、園・学校という文脈における食事場面ならではの様々な配慮や工夫がされている。食事はどの家庭でも毎日行われており、食べるという営みは共通だが、一人ひとりの誕生からそれまでの食経験は、家庭によっても子ども個人によっても異なる。そうした異なる食経験をもち子どもたちをクラス集団として支援する際、個々の違いを配慮しながらも、子どもたちに必要な食の育ちを保障する必要があり、保育者や教師には柔軟なかかわりが求められる。また、食事場面は情緒的な葛藤を引き起こしやすい場面でもあり、そうした点からも、食事場面において高い専門性が保育者や教師に求められていると言えよう。

食事場面における保育者の専門性に関する研究は、主に 1)保育者の意識やかかわり、2)食育の実践、3)保護者や栄養士等との連携、4)養成校との連携について行われ、蓄積されてきている。中でも 1)保育者の意識とかかわりの研究は、日々の保育実践そのものであり、子どもの育ちを保障するために重要な保育プロセスの質を構成する要因として、近年関心の高まっている領域である(淀川, 2018)。「プロセスの質(process quality)」が「子どもたちの幸せ(well-being)のためになる環境と経験のあらゆる特徴」(OECD, 2015)と定義されているように、日々の実践の中で子どもたちの幸せにつながる食の育ちを考えるためには、日々の実践における保育者の意識やかかわりについて詳細に検討する必要があるといえよう。

食事場面に関する保育者の意識に関する研究では、保育所保育士と幼稚園教諭の比較(伊藤, 2011)、養成校学生と保育者の比較(入江, 2008)、保育経験の長さによる比較(伊藤・七木田, 2014)というように、施設形態の違いや保育経験の有無・年数の違いといった保育者側の状況の違いに着目した研究がなされている。また、偏食場面と遊び食べ場面における意識の比較(伊藤, 2012)のように場面固有性に着目した研究もなされている。しかし、いずれの研究においても、子どもの食の育ちの連続性という視点からの保育者の意識調査は十分になされておらず、乳児期から幼児期、そして児童期へとつながる食の育ちの支援を考える上で、その時期を網羅する横断的・縦断的調査を行う必要がある。

食事場面における保育者のかかわりの研究では、乳児と保育者の相互交渉の微視的分析研究(石黒, 2003, 2005)、乳児の食具使用の支援(河原, 1999)や乳児の拒否行動場面(河原, 2004)といった特定の文脈に関する相互交渉分析もなされている。幼児期には、保育所保育士の働きかけの分析(伊藤, 2013; 安田他, 2006)や幼稚園教諭の言葉かけに関する分析(中澤他, 1995; 今村, 2008)がなされているが、いずれも乳児期からの育ちや小学校へとつながる育ちの連続性について十分に考慮されていない。また、年長児担任の幼稚園教諭と小学校1年生の担任教諭の発話比較分析(今村・西岡, 2015)では、異なる幼児・児童を対象とした研究であることと、保育者・教師から子どもへの発話分析にとどまっており、子どもとの双方向的なやりとりの分析にはなっていないため、課題が残っている。保育プロセスの質としての保育者と子どものかかわりについて検討する際、保育者・教師と子どもとの応答的なやりとりの中で立ち現れる保育者の専門性について明らかにする必要があると考える。

2. 研究の目的

上記の乳幼児期における食事場面に関する研究の背景をふまえ、乳幼児期から児童期の子どもたちの食の育ちを支える保育者・小学校教師の役割に焦点をあて、子どもたちへの食の支援に関する意識を明らかにすることを目的とする。特に、就学前の(園での)食経験と就学後の(学校での)食経験の連続性と不連続性に着目し、入学前後の移行期における食の支援の実践について、保育者の意識・かかわりや子ども自身の意識を事例分析により検討する。(なお、本稿では保育所保育士、幼稚園教諭、認定こども園保育教諭をまとめて「保育者」と表記している。)

そこで本調査では、食の支援に関する保育者・教師の意識に関して、子どもの食の発達の連続性という視点から調査を行う。また、食の支援における保育者・小学校教師のかかわりに関して、子どもの食の育ちという視座に立った上で、保育者・小学校教師と子どもたちとの応答的なやりとりの中から、保育者の専門性を検討する。同時に、保育者・教師の意識調査だけでなく、子ども側の意識調査を行う必要があるが、乳幼児期には言葉の発達によって適切に考えを表現できないという制約がある。そのため、言葉を媒介したインタビューに応じることができる年長児(5歳児)と小学1年生を対象に、食事場面の描画とインタビューを行うことで、子ども自身が園や学校での食経験をどのように捉えているかを検討する。

3. 研究の方法

本調査は、乳幼児期から児童期の子どもたちの食の育ちを保障する保育者・小学校教師の役割について、保育者の意識・かかわりや子ども自身の意識という観点から検討するため、以下のように調査を行った。

研究1 食事場面における保育者と子どものかかわりに関するテキスト分析（平成28年度）

本研究では、保育士養成校のテキストにおいて、食事をコミュニケーションや団らんの場として捉え、関係論的な観点から食事場面の意義や求められる保育者のかかわりについてどのように取り上げられているかを確かめるため、複数の出版社から刊行されているテキストを比較分析した。なお、保育士養成カリキュラムのうち「子どもの食と栄養」に加え、食事場面と特にかかわりが深いと考えられる「健康」「言葉」「人間関係」「乳児保育」を対象とした。

分析方法：1)すべてのテキストについて、日々の食事場面に関する記述があるかを確認し、記述の認められたテキスト数を算出した。その後、2)各テキストから食事場面のかかわりの具体的な記述を抜き出し、その特徴を分析した。

研究2 5歳児の園における食事場面に対する認識に関する調査（平成29年度）

調査方法：都内私立認可保育所A園とB園、都内私立幼稚園C園の5歳児クラス園児、計36名（各園男児6名、女児6名）及び担任保育者を対象に、2017年6～8月に調査を行った。調査1として、園児2名入組に対して「〇〇保育園でどんな風にお昼ごはんを食べているかを教えてください」と述べ、描画とインタビューをする旨を伝え、画用紙に「(園名/クラス名)で(該当児)くん/ちゃんが給食/お弁当を食べているところ」を描画してもらった。さらに、調査2として、担任保育士への半構造化インタビューを行なった。まず、クラス全体のことについて、遊び・食事・午睡(休憩)の流れ、食事の場所や時間・席の決め方、食に関連して育みたいと考えていること、保護者との情報共有、小学校の先生との情報共有について質問した。さらに協力児について、日頃の生活全般の様子(園児自身のことや友達関係)、園での食事の様子、保護者との食事の話題共有、小学校入学に向けて園児の食で気になること等を質問した。他に、食事場面の観察、保護者アンケート、栄養士・調理師アンケートも実施した。

分析方法：まず、全体的な特徴を把握するため、何が描かれていたかに注目し、描画内容の分類を行った。園ごとに描画内容ごとの絵の枚数を算出し、枚数の多かった園と少なかった園との比較から、食事の特徴と描画内容との関連を検討した。その後、各描画内容が描かれていた絵を数枚ずつ取り上げ、詳細な特徴を見ていくことで、園児らの具体的な認識を検討した。最後に、食事(給食/弁当)への関心が高い園児と低い園児との比較によって、特に関心の低い園児が何をどのように認識しているか分析を行った。

倫理的配慮：調査実施にあたり、園と保護者に向けて、調査の目的と内容・データ及び個人情報取り扱い・研究発表予定を記した調査依頼文を配布した。園での実施は園長先生に許可を頂いた。保護者には同意書を提出してもらった。本調査の参加協力児は、同意書の提出のあった家庭から担任保育士に抽出してもらった。調査実施時には、描画開始後に園児が継続を望まなかった場合は、すぐに中止し、担任保育士の元へと案内した。

研究3 5歳児の園における食事の課題に関する調査（平成29年度）

調査方法と倫理的配慮に関しては、研究2と同様である。

分析方法：担任保育士の語りと園児自身の語りから、園での食事で課題があると判断される園児と、そうでない園児とを分けた。課題がある園児については、どのような課題か、担任保育士の語りをもとに分類した。その後、語られた課題の種類ごとに、該当する園児がどのような描画と語りをしたかを分析し、特徴を検討するとともに、比較対象として特に課題がないと判断された園児の描画も分析した。最後に、これらの分析結果をふまえ、園での食事経験について考察した。

研究4 小学1年生児童の学校における食事場面に対する認識に関する調査（平成30年度）

研究2および3で調査を行なった5歳児クラス園児36名中、12名について小学校進学後に同様の調査を行なった。調査方法・分析方法・倫理的配慮については研究2と同様である。

4. 研究成果

研究1 食事場面における保育者と子どものかかわりに関するテキスト分析（平成28年度）

食事場面における保育者の意識とかかわりに関する質問紙及び観察調査を行う準備として、先行研究のレビュー及び保育士養成校用のテキスト分析を行った。先行研究レビューでは、保育における食を扱った論文のうち、特に保育者と子どもたちとのやりとりを対象とする研究を検討した。乳児期は、子どもの食行為の発達(食具の使用を含む)の援助の一部として言葉がけを扱う研究が多かった。幼児期は、座席や同席者、食事時間など構造的要因を扱う研究、保育者の配慮や言葉がけの特徴を検討した研究があったが、保育者の配慮や重視点と実際のかかわり方との関連を扱った研究はなく、年齢による違いも明らかにされていなかった。テキスト

分析では、保育士資格必修科目のテキスト(「子どもの食と栄養」5冊、「保育内容 健康」4冊、「保育内容 人間関係」4冊、「乳児保育」6冊)を分析した。「子どもの食と栄養」では、子どもの状態に応じたかわり、先生や友達と楽しく食べること、乳児期は保育者との安定した信頼関係での個別のかわり、幼児期は友達との集団での食事を楽しむことの記述が多かった。一方、幼児期について、子どもが自分の判断する場面をつくること、発達に即した物的環境(時間や空間)・人的環境(人数等)への配慮の指摘は少なかった。また、保育者からの言葉がけや子ども同士のやりとりに関する記述が少なく、食事での会話の意義や内容に関する記述は限定的だった。「乳児保育」では、授乳や離乳食の与え方の手順やスキル、配慮が書かれているが、保育者の言葉がけに関する記述は少なかった。「保育内容 健康」「保育内容 人間関係」でも、食事場面での言葉がけに関する記述はほとんどなかった。養成課程で食事場面における言葉がけや子ども同士のやりとりについて考える機会は少ない可能性が示唆された。

研究2 5歳児の園における食事場面に対する認識に関する調査(平成29年度)

平成28年度に実施した園での食事に関する先行研究レビュー及びテキスト分析(研究1)による知見をふまえ、東京都内の私立保育所2園、私立幼稚園1園での5歳児クラスを対象とした1)食事場面の観察、2)園児の描画調査、3)描画をふまえた園児へのインタビュー、4)担任保育者へのインタビュー、5)保護者アンケート、6)栄養士・調理師アンケートを実施した。1から4は6~7月と1~3月の2回、5と6は卒園前の1回実施した。そのうち、主に2、3、4に関する分析・発表を行った。これらの分析から、5歳児の園での食事場面に関する描画の内容は、食事の詳しい内容、食事空間の全体、食事の段取り、一緒に食べる友達であった。給食の園で、園児がどのくらい食べるか主体的に判断している園では、ほぼ全員が主食・主菜・副菜・汁物をバランス良く描き、食事の内容をよく認識していた。また、食事の準備から片付けを園児が主体的に行う園では、食事の段取りもよく認識し描画していた。さらに、同じクラスの園児と保育室で食事を取る園では、一緒に食べる友達を多く描いていた。食事への関心が低い園児は描画の内容が乏しく、援助の検討が必要であることが示唆された。保育者のインタビューと合わせると、描画に表れる園児の食事への関心の高低や得手不得手感は、保育者のインタビュー内容とほぼ重なっていた。一方で、保育者は園児の描画内容を見ることで、園児が食事場面に関連して何を認識し、誰を意識して描画に含めるかといった観点から、日頃の保育では見えていなかった部分に気付いたり、園児の成長への手ごたえを得たりしたことが、語りの中で見られた。

研究3 5歳児の園における食事の課題に関する調査(平成29年度)

平成29年度実施した5歳児クラス園児36名を対象とした調査(研究2)のうち2から4の分析を行い、特に園での食事に課題をもつと保育者が認識した園児について、園児自身が園での食事をどのように認識しているかについて分析を行なった。保育士の語りから、食事の課題として友達関係、食事への集中、マナーの習得、苦手なものを時間をかけずに食べることが挙げられた。はランチルームの園で、は保育室で食べる園でのみ語られた。園児の描画と語りから、課題として語られた内容は園児の描写がないもしくは少なく、園児自身が十分に認識していないことが示唆された。一方、保育者と園児の認識のずれが描画から見出された事例もあった。

研究4 小学1年生児童の学校における食事場面に対する認識に関する調査(平成30年度)

研究2および3の調査協力児が小学校に進学したため、36名中12名について、進学先で1)給食場面の観察、2)児童の描画、3)描画をふまえた児童インタビューを実施した。現在、未分析の保護者アンケート、栄養士・調理師アンケートの分析を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

淀川裕美, 5歳児は、園における食事場面をどのように認識しているか 描画とインタビューの手法を用いて, 保育学研究, 56(3), 2018, 103-114.

淀川裕美, 5歳児の園における食事の課題に関する分析 園児の描画及びインタビューと保育者のインタビューからー, 保育学研究, 57(2), 2019, 印刷中.

〔学会発表〕(計 1 件)

淀川裕美, 食事場面における保育者と子どものかかわりに関するテキスト分析, 日本教育心理学会第58回大会,

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

（1）研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

（2）研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。